蒲島郁夫熊本県知事

皆さん、おはようございます。市長と町長が原稿なしでスピーチをされましたのでどうしようかと思いましたが、やはり知事としても原稿なしでやらなければいけないと思って思い付くままにこれからスピーチをしたいと思います。

合併というのは、私にとって大きな意味では3度経験しました。1度は私が小学校の時、私は稲田村というところで生まれましたけれども、そこと中富村と来民町が合併して鹿本町というものに生まれ変わりました。

その時に、私の親たちは合併反対で子供たちを学校にやらないという運動をしました。そこで2週間ほど村の公民館で勉強しました。今ではとても良い思い出です。そのくらい合併というのは激しい対立があります。当時は刃傷沙汰になったこともありました。しかしながら、鹿本町になった瞬間に皆さん本当の鹿本町の町民になったのではないかと思っています。そういう意味では、あの時はみんな村のことを愛していたんだなと。反対派の人も賛成派の人も愛していたと。その経験が私にありますものですから、今度熊本市と城南町、熊本市と植木町の合併についても上手くいけばいいなと思っていました。合併したら皆さんの心は一つになります。しかし、合併するまでの想いはとても激しいものがあります。特に、反対される方々の想いはとても激しい。そこで民主主義というのは、本質的には対立の要素があります。そして、民主主義のいいところは、その対立を越えてより高い舞台に上ること、それが重要だと思ってます。城南町の方々も、それから熊本市の方々もとりわけ今度の城南町の高い投票率というのは、多くの方が賛成派も反対派の方も町を愛していると、その現れではないかと思ってます。ただ、先ほど言いましたように民主主義のいいところは、一度決定が下された、あるいは民意が下された後ではそれに向かって一致協力していくと、対立を越えて協調するというところにいいものがあります。ただ、多数派は是非考えていかなければいけないことは、少数派の方々の想いがとても重いと、それを想いいたしつつ今後の合併を進めていっていただければとても嬉しいと思います。

私は今回、熊本市と城南町と植木町の合併の形を見て、鳥の形に似ています。皆さんも帰って地図を見られるとわかりますが、両方の羽を広げたようなそのような形をしています。

これは私は歴史的なことだと、非常にシンボリックなことだと思っています。熊本県というのは、これまで長期的な戦略にとても下手な県だと思います。例えば、一番今でも失敗だと思うのが、五校があったから九大は熊本に来るものだと皆さん思ってらっしゃったと思いますけれども、福岡に行ってしまったと。福岡はものすごく運動しました。それから新幹線のあり方もそうですけれども、普通だったら福岡から熊本、熊本から鹿児島と行くところですけれども、鹿児島の人は一生懸命鹿児島から始めたと。あ、と思った瞬間に鹿児島が終着駅になって、取り残されない形での戦略を持っていると。最後に残された熊本は、今丁度、福岡と鹿児島の真ん中にあります。この真ん中が頑張らないと両方に客を取られてしまうと。あるいは両方に人が行ってしまうというふうな危機感を持っておりました。普通、知事というのは、政令都市に反対するものです。だいたい歴史がそういうことを証明しております。それは権限とか様々なことでやはり県で主導権を持ちたいと、そう

いう小さな短期的なことを思うと100年、200年の計を忘れてしまう。私はそういう意味で、今回、熊本市が城南町とそして植木町と合併し、中核都市、そして政令都市。政令都市の先には道州制の後の州都を目指して、そこに熊本県民がみんなで夢を持って進んでいくと。その第一歩、歴史的な今回の調印ではないかと思っています。

そういう意味で今日、調印をしながらとても考え深いものがあり、普通、調印式ではこのように自分が調印したペンは持って帰るんです。これは熊本市の財産ですけれども、是非一本だけ記念に持って帰ってよろしいでしょうか。ありがとうございます。このような歴史的な調印式にサインをすることが出来て私もとても嬉しく思います。それから、皆さんもこのような歴史的な調印式に参加され、そして署名をされ、そしてこれから100年後に「あの時の合併は最高の合併だった」と、そのように我々の子孫が思うようなそういう調印式であり、そしてそのような第一歩であり、そのような歴史的な瞬間に我々は参加しているんだと。その喜びを考えながら今日は皆さんと共にこの調印式を喜びたいと思います。

大変型破りの挨拶になってしまいましたけれども、市長、町長が原稿なしで読むものですから、私のスタッフには大変悪いんですけれども、読まずに申し訳ありませんでした。

今日はどうもおめでとうございます。